

金沢箔 断切製箔技術調査報告
—断切金箔職人から技と系譜の聴き取り調査—

北陸先端科学技術大学院大学
加藤 明 研究員

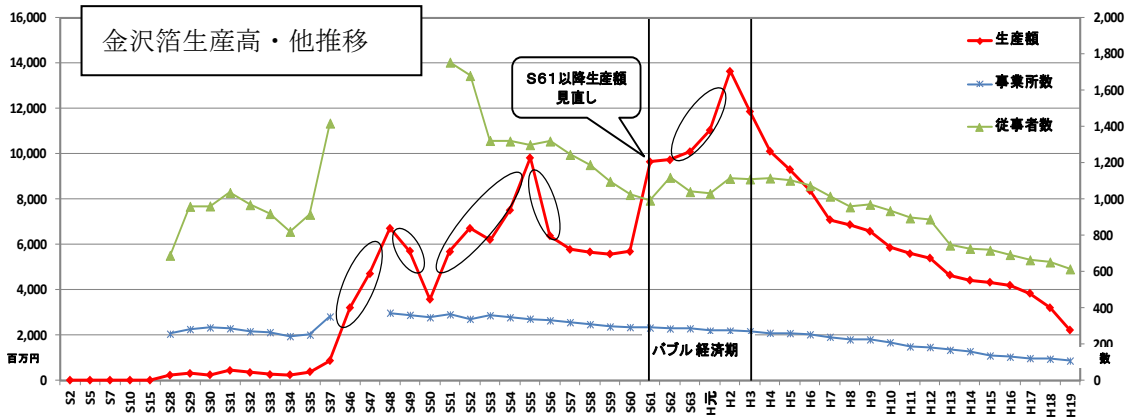
はじめに

金沢箔は、400年以上の歴史を持ち、まさに金沢を代表する伝統産業として金箔については全国シェアの99%を占めています。しかし、歴史と共に歩んできたこの伝統技術も、今や生活様式の変化や昨今の厳しい経済状況の中で苦境を強いられ、急速に衰退の一途をたどっています。実際、その伝統技術を保持する職人の数は、十数年前に比較すると3分の1まで減少し、平均年齢が60代後半となってきました。その現場では、今まで受け継がれてきた技術の質的保持と継承をはかることが何よりも急務となっており、とりわけ、昭和40年代に登場してきた断切という製箔技術の確立から発展の経緯を残すことが重要であります。こうした状況をかんがみ、現在いる職人から聞き取り調査を行い、現状の中でより多くの技術的精度と継承の系譜をたどって記録保存し、また将来に向けて活用するための資料づくりを進めることを本事業の目的とします。

1. 断切金箔出現の背景

断切金箔（以下「断切」と省略する場合がある）が生まれた時代背景には、昭和36年以降、真空蒸着法という箔代替品製造技術が開発されて、銀箔、洋箔、アルミ箔生産が真っ先に大きな打撃を受けていたという状況がある。一方、この時期は日本経済の高度成長期にあたり、仏壇仏具の宗教用具の需要が増大し、その材料としての金箔の需要が急増した。これにより、金箔の需要が増大し金箔職人は不足、他の箔職人は過剰という生産面においてアンバランスな状況に陥っていたのである。そのような背景で昭和40年代初頭に登場したのが、銀箔や洋箔を打つ技術で金箔を打つという断切技術であった。伝統的な縁付（えんづけ）金箔¹と比較すると生産性が約10倍であるといわれている。その理由は2つあり、1つは打ち紙の違いである。縁付の場合は、紙の仕込みに6か月前後の時間を要する。ところが断切の場合は、箔用のグラシン紙にカーボン等の顔料を塗った紙を用意すればよいので、長くても1週間程度で出来てしまう。もう1つの理由は、仕上げの断裁方法が異なるからである。縁付の場合は1枚1枚切り揃えるという工程があって非常に手間が掛かるが、断切の方は仕上げ用紙に金箔を何枚も挟んだまま、まとめてぱっさりと断裁するので時間が極端に短縮できる。断切金箔は、低コスト、短納期で大量の金箔を生産するという、この生産性の高さにより金箔の需要増に応えていったのである。

¹ 現在は、「金沢伝統箔」という。以下「縁付（金箔）」と省略する。



出所：石川県箔商工業協同組合提供資料より作成

注) 箔生産高には、金箔、銀箔、洋箔、アルミ箔が含まれるが、比率的に多くを占める金箔の傾向を概ね示していると思われる。折れ線グラフが切れている個所はデータが存在しない年度。また、昭和60年度から61年度にかけて生産高が急上昇しているが、これは、昭和61年度より生産額の算出方法を変えた（それ以前は原価ということであるが詳細は不明）ことによるものである。

2. 聞き取り調査

聞き取り調査対象者プロフィール一覧（五十音順）

氏名	生まれ	職歴
今村俊明	金沢市森山	父の下で見習いから始め、業界に入ってから57年目。アルミ箔、洋・銀箔を経験。昭和37～38年頃に和紙からグラシン紙に切り替えて、以降断切金箔を手掛ける。
江口具視	大阪市	同級生の父親が箔業を営んでいたのが縁で、この業界に入る。昭和26年よりアルミホイルを始めとして、その後、洋・銀箔、アルミ箔、断切金箔を手掛けた。
高橋幸一	金沢市東山	昭和27年より父の下で就業。アルミ箔、洋・銀箔を経験。昭和40年以降断切金箔の開発に携わってきた。断切金箔と、付加価値の高いプラチナ箔を打つ。
田中年雪	金沢市材木町	昭和44年より父の下で就業。アルミ箔、洋・銀箔を経験。グラシン紙での断切金箔に切り替わる時期に業界に入る。手漉き和紙の紙仕込みができる最後の世代。

3. まとめ

■断切金箔の意義

伝統産業は、伝統的な技術を基盤として、その時代の環境変化に適応して持続的な変革を遂げてきた産業である。400年以上の歴史を持ち、ほとんど江戸時代以来の技法が踏襲されて今日に至っている金沢箔においてもイノベーションは存在する。近代におけるそれは、断切技術である。

断切技術は、2つの点で産地の発展に大きな貢献をした。1つは、金箔の急激な需要に応えられる非常に生産性の高い製造技術を開発し、産地を長期間発展に導いたことである。そのパフォーマンス面での変化の程度において、それはラディカルなプロセス・イノベーションであったといえよう。2つ目は、金箔の需要が増大し金箔職人は不足、他の箔職人は過剰という生産面においてアンバランスな状況を解決し、産地の金箔以外の箔職人の職替えを可能として職人の危機を救ったことである。低価格、低品質である断切金箔がやがて、縁付金箔が用いられてきた領域にオーバーラップしてくる、一見すると、断切金箔は縁付金箔を駆逐する破壊的技術の範疇のように思える。しかし、縁付職人に少なからぬ影響を与えたものの、それ以上に需要に応じて金箔の市場を広げたこと、現在でも生産量は減ったものの付加価値の高い商品として縁付金箔は存在していることを考えると、それは当てはまらない。断切金箔は縁付金箔を用途的に補完するものであり、決して縁付金箔を駆逐するものではないのである。

■金沢箔の現状と課題

ある地域における産業が継続するには大きく2つある。1つは外部から、外部市場と直接に接触を持っている企業（群）を通して需要が流れ込み続けるかこと、もう1つはその産業が群として柔軟性を保ち続けられるかということである。「明治、大正の初めは京都、大阪、東京の商人を経て各地へ販売されたが、当地の業者は此中間商人の介在を避けて全国的に直接販売網を張り、販路の開拓に進出し、・・・」と、ある文献にあるように、金沢箔産地においては昔より産地の問屋が需要搬入業者として大きな役割を果たしていた。そして、江戸時代より幕府の制限下にあつて金以外の銀、洋箔、錫（すず）などを製箔していた職人の多様な製箔技術、その技術的柔軟性が、今日の金沢箔の持続的な優位性の源である。

しかしながら、現状は金沢箔の生産高は下げ止まらない状況である。原因は、金箔の用途の80～90%を占めるといわれる、仏壇仏具、神社仏閣の需要激減である。この背景には、日本独自の宗教（仏教）文化の衰退、中国における仏壇仏具生産の影響、さらに金仏壇に替わる唐木仏壇、家具調仏壇の台頭などがある。もちろん中国を中心とした安価な外国箔の影響もある。このような経営環境において、今、金沢箔産地に関わる全ての人が、金沢箔と箔職人を守り後世に残そうと、新市場を開拓すべく箔工芸品への展開、金沢箔を活かすさらなる多角化、他分野への展開を図っている。

■謝辞

本報告書作成にあたり、石川県箔商工業協同組合、及び今村俊明氏、江口具視氏、高橋幸一氏、田中俊幸氏に多大なるご協力を頂きました。ここに深甚なる感謝を捧げます。

※加藤 明 研究員

現在、東北大学経済学研究科 地域イノベーション研究センター 研究員

2008年4月～2012年3月まで北陸先端科学技術大学院大学 地域・イノベーション研究センターにて、伝統工芸MOT教育、及び伝統工芸産地、産業に関わる調査、研究に従事。